復刻版

大日本傷痍軍人会機関誌

みくにの華

全3巻

1937年1月～44年11月

戦時下、戦傷病者のための情報提供や支援とともに
「白衣の勇士」としての誇りを鼓舞した
大日本傷痍軍人会の機関誌を復刻。
負傷しあるいは病に倒れ、命からがら帰還した傷病兵士に
さらに「再起奉公」を求めた戦時体制の
ありようを明らかにする貴重資料！

戦後の障害者福祉の原点ともなった
傷痍軍人対策を明らかにし、
厭戦気分を払拭させようと、元兵士たちを
「御国（みくに）のために」と慰撫・鼓舞する、
戦時下の様相を明らかにする資料を復刻！

第五十七號 （1）
みくにの華（月刊）
昭和十六年九月一日
大日本傷痍軍人會發行
目次抄
軍神乃木大將逝いて三十年

揃定価◉75,000円＋税
（税込82、500円）

B5判・上製・総978ページ

解説◉上田早記子

推薦◉一ノ瀬俊也
サトウタツヤ（五十音順）

六花出版

刊行にあたって

「挙国一致」「奮起せよ」「再起奉公」の美辞麗句を掲げ、障害を受けてなお奮起せよと鼓舞する本誌からは、当時の傷痍軍人たちの置かれていた、生活への困惑や貧困が鏡のように映し出される――

激しい戦闘の結果、多くの負傷者が出た日露戦争後、障害者となった元兵士たちは「廃兵」と呼ばれ、十五年戦争の時代は「傷兵」そして「傷痍軍人」として軍事援護政策の中に組み込まれた。

帰還した傷痍軍人たちは、それぞれ故郷で障害に苦しむだけでなく、障害ゆえに困窮した生活を立て直そうと、待遇改善運動も展開する。

総動員体制をもって戦争に突き進む政府にとって、財団法人大日本傷痍軍人会を結成して各地の傷痍軍人会を統制する必要が生じたのである。

本誌『みくにの華』は、その大日本傷痍軍人会の機関誌として、退院後の恩給や職業訓練などの情報を提供し、「相談欄」を設けて傷痍軍人たちの悩みに対応してきた。同時に、全国の傷痍軍人会支部の様子をも細やかに報道した。

いっぽう、心も身体も傷ついた傷病兵士に対して、生活のための行商を戒め、待遇改善を求める動きに対して時代錯誤だと切り捨て、障害があってもなお「お国のため」に役立つことを強要し、あるべき傷痍軍人像を呈示する媒体として戦傷病者を牽制する役割を果たした。

国のためにたたかい、国のために障害者となった傷痍軍人に対し、国はどう向き合ったか。

戦争とトラウマの問題が問われている今日、国策と戦争と障害者の問題を考える上で大きな示唆を与える本誌を復刻する。

（六花出版編集部）

関連年表

年	事項
1894	日清戦争
1904	日露戦争
1906	障害が残った負傷兵に対しての廃兵院条例
1914	第一次世界大戦
1931	柳条湖事件
1934	廃兵院、傷兵院と改称
1936	大日本傷痍軍人会発足。当時の傷痍軍人の数は約四万人
1937	機関誌『みくにの華』創刊
1937	盧溝橋事件
1937	内務省臨時社会局（のちの厚生省社会局）が軍人遺家族の援護事業として臨時軍事援護部を設置
1938	傷痍軍人保護のため厚生省の外局として傷兵保護院が設置される
1939	傷兵保護院、軍事保護院に改称
1939	傷痍軍人五訓
1941	日米開戦
1945	敗戦
1945	「恩給法ノ特例ニ関スル件」公布、傷痍軍人に対する恩給の減額あるいは廃止
1945	軍事保護院廃止、厚生省外局として保護院と医療局を設置
1946	大日本傷痍軍人会解散
1952	サンフランシスコ平和条約発効。占領期が終わる
1952	戦傷病者戦没者遺族等援護法公布
1952	日本傷痍軍人会発足
1953	恩給法復活
2006	戦傷病者史料館であるしょうけい館開館
2013	日本傷痍軍人会解散

内容見本

（12）　昭和十四年十二月一日（第三種郵便物認可）　みくにの華（月刊）　第三十六號

支部便り

（カット寫眞は福岡縣支部懇談會状況）

京都府支部…指導者講習會

京都府支部の指導者講習會は、十月十六日午前九時より東本願寺議事堂にて開催、指導者として軍事保護院より高橋指導課長、本部より岩倉事務總長、佐藤相談部長出席、講習員一〇四名、傍聽者二十八名、都地主事の開會の辭に次ぎ、宮城遙拜、默禱、五訓合唱、支部長挨拶（代）あり、「傷兵保護の精神」と題し高橋指導課長の講演あり、五分休憩後、岩倉事務總長「會員指導に就て」と題し講演、午後一時より會員指導に關する協議懇談に移り、五時二十五分散會した。

大阪府支部…指導者講習會

大阪府支部の指導者講習會は、十月十八日午前九時より偕行社に於て開催、指導者として軍事保護院より高橋指導課長、本部より岩倉事務總長出席、講習員七十四名傍聽者八十一名、會は九時二十分西田幹事長の開會の辭に始り、宮城遙拜の後、默禱、牟井支部長の挨拶に次いで高橋指導課長「傷痍軍人の道」と題し講演、續いて岩倉事務總長「會員指導に就て」と題し講演、何れも講習員一同に多大の感銘を與へ、午前十一時五十分終了、午食休憩後、會員指導に關する協議懇談に移り、質疑、應答、希望等あり、午後四十分有意義に散會した。

愛知縣支部…指導者講習會

愛知縣支部の指導者講習會は、去る九月十六日開催、指導者として軍事保護院高橋指導課長、本部より岩本指導部長出席、講習會員一一二名、傍聽者一四名、午前九時より講習開始、指導者講演あり各會員は何れも熱心に聽講研究するところあり有意義であつた。

島根縣支部…分會行事

島根縣支部美濃郡分會では十月二十日午前九時より高津町柿ノ本人丸神社境内寶物館にて精神修養會を開催、支部より玉木主事出席郡內各町村長、益田警察署長代理等の來賓一八名、出席會員七〇名

島根縣警察練習所主任畑野警部の修養講話あり、終つて懇談會に移り有意義に散會した。

鳥取縣支部…分會發會式其他

鳥取縣支部管下三分會の發會式は左記の如く施行された。

◇八頭郡分會　十月五日午前十時より同郡賀茂村育英小學校講堂にて開催。會員一一五名中七五名出席。分會々則、役員詮衡をなし、午前十一時より發會式に移り、支部旗授與後本會佐藤相談部長講演あり、懇會裡に

隊長、澤野金澤市長其の他多數參列、支部より成田支部長、蓮林副支部長以下出席、會員九百名參集盛會を呈した。

會は午前九時半より戰歿軍人並物故會員慰靈祭を執行、續いて午前十時五十分より總會に移り、支部長告辭、會長訓辭（會員松倉憲兵大佐代）軍事保護院總裁告辭、（代）來賓祝辭あり、宣言決議に移り、採擇、聖壽萬歲三唱し閉會、引續き千田陸軍少將の講演あり、午後一時より慰安會に移り、同三時半和氣藹々裡に散會した。

名。◇自九月十六日至同十八日梅津寺高濱小學校にて開催出席者七八名。◇九月二十日至同二十二日宇和島市市野川龍華山にて開催。出席者六〇名。

何れも本會副會長蒲陸軍中將の傷痍軍人五訓に關する有意義なる講演あり、南光坊住職板野師等の法話、その他諸氏の日本精神に關する講演を聽取、また就寢前四十分座禪修養に努むるなど、大いに修養に勵んだ。

福岡縣支部…第二回總會

第36号　1939年12月1日

（17）　第三十一號　みくにの華（月刊）　昭和十四年七月一日（第三種郵便物認可）

傷痍軍人の龜鑑

右腕を失つた老勇士

増岡翁（三重）再起の姿

郷黨の善行者として知事より表彰さる

みくにの華六月號に滿洲事變の模範三傷痍軍人を紹介したが本號に於ては日露役の一老傷痍軍人の輝かしい更生ぶりを掲げる……

◇

その模範老傷痍軍人は三重縣阿山郡上野町[redacted]、元歩兵軍曹増岡喜三郎翁（六一）その人だ。増岡翁は明治三十二年十二月、大津歩兵第九聯隊に入營して、軍隊生活のスタートを切り同三十五年十二月除隊し、三重縣巡査を拜命して勤務中、日露開戰となり應召、第二軍に屬し金州、南山の激戰に參加して九月遼陽の大會戰に奮戰、遼陽城南門突撃に當り敵機關銃の亂射に遇ひ右手上膊其他に十數發の敵彈をうけ後送、現地病院で手術の結果遂に右手を切斷するの止むなきに至つた。そして白衣の病院生活を續け、翌年五月軍曹に進み兵役を免除されて歸鄕、明治三十九年から三年間鄕里に近い阿山郡玉瀧村役場の書記となり、其後煙草小賣店を開業し名古屋地方專賣局伊山煙草小賣人組合長を二十五年勤續して、名古屋地方專賣局長より表彰をうけ、この他公職では國勢調査委員に三回擧げられてゐるが同氏が特に模範とされるのは、大正十二年に傷痍軍人の團體として卒先、伊山星勇會を組織し遂に三重縣傷痍軍人團を結成、分會を置き團報を發行して傷痍軍人の團結、人格向上に努め、伊勢宮造營工事には團員五十名が選ばれて勤務奉仕するなど大いに活躍し、この勤務奉仕で金一封を下賜されるや當時滿洲三軒家現地に記念碑が建碑されるのに寄附するなど美擧相次ぎ、大日本傷痍軍人會設立と同時に團として直ちに入會、今日に至つてゐる。而して個人として私立白鳳圖書館を開設して鄕土研究資料をも蒐集して地方文化の開發に努め、又右手を失つて後も殘された左手で書畫の研究を怠らず、その技術は常人も及ばぬ進境をみせ精神一到、何事かならざらんを文字通り克服し眞に世の模範として鄕黨から敬慕され昨年十月十日には佐藤三重縣知事から美擧善行者として表彰された程である。

寫眞は最近の増岡翁、カットは左手で描いた書軸

町村吏員に傷痍軍人を採用

内務省・保護院より地方長官に通牒

傷痍軍人の職業については官民共に頗る熱意をよせ、先に農林省では產業組合が新らしく職員を就職せしめる場合は努めて傷痍軍人を採用するよう關係方面に同省經濟更生部長と傷兵保護院業務局長と連名で通牒したが今回更に内務省では町村吏員にも極力傷痍軍人を採用させるべく方針を決定、而して此の採用は町村吏員充實助成費により増員する場合を指してをり、去る六月十五日付で内務省地方局長、傷兵保護院業務局長の連名で次の如く地方長官に通牒するところあつた。

町村吏員充實助成費に依り増置する吏員に傷痍軍人採用方に關する件

町村吏員充實助成費の實施に關しては夫々手續中のことゝ存候處、町村に於て今次事變に依る傷痍軍人にして當該町村の吏員たるに適當なる者ある場合之を増置する吏員に採用するは機宜に適するものと認められ候條貴管下町村を適當に指導せらるゝ樣御配意相成度

第31号　1939年7月1日

国や社会が障がい兵士に向けたまなざしが浮かび上がる資料

一ノ瀬俊也◉埼玉大学

長きにわたる日本経済の低迷、格差や貧困の拡大は、私たちの社会が生活困窮者に示してきた酷薄な姿勢をいよいよ露わにさせている。これはけっして今に始まったことではなく、江戸時代から明治時代にかけて普及した通俗道徳は、人びとの間に今でいう自己責任論、すなわち困窮は自らの怠惰の結果であるという考え方を普及させ、困窮する人びとにたいするまなざしを冷酷なものとした。

それは戦争で国家のために命を投げ出したり、心身に深い障がいを負った軍人およびその遺家族にさえも向けられた。彼らはわずかな恩給扶助料を与えられたのみで、あとは国や地域に頼らず自らの力で生きていくことを強要されたのである。

今回復刻された大日本傷痍軍人会の機関紙『みくにの華』は、昭和戦時期の政府による傷痍軍人統制策が上記の姿勢で一貫していたことを示す好個の史料である。たとえば一九三七（昭和一二）年一月発行の第一号に掲載された「大日本傷痍軍人会趣意書」は、傷痍軍人たちに向かって「君恩の厚きに狃（な）れ依存をのみ事とす」ればやがて「世人の指弾怨嗟」を受けるだろうと恫喝的に述べている。同紙には恩給制度に関する解説や相談など、傷痍軍人政策の実情をうかがわせる記事が多数掲載されており、活用されればこれまで必ずしも手厚いとはいえなかった近代日本の傷痍軍人史研究のみならず、戦時動員体制史の解明に裨益するところ大である。よってここに広く推薦する次第である。

（いちのせ・としや）

イノベーションの苗床としての「傷痍軍人」

サトウタツヤ◉立命館大学

戦争を構える国にとって兵士の動員数の多寡は軍事力における重要な要因であり、勝敗の帰趨に直結する。無事に帰還する兵士だけであれば良いのだが、他の多くの仕事とは異なり戦傷病死する兵士も多い。

さらに、生と死という二つのカテゴリーの中間状態として傷痍軍人という存在がある。どっちつかずの宙ぶらりんの状態は文化人類学の概念における移境態（liminality）であり、実はイノベーションの苗床だとも言われる。傷痍軍人の数を量で数えることはできるが、その対応のためには一人ひとりの傷病の状態や置かれた状況に寄り添って治療・リハビリやキャリア設計を行う必要がある。

それを担うべきだったのが大日本傷痍軍人会であり、その活動を垣間見せてくれるのが『みくにの華』である。その活動は基本的には国策遂行のための上から目線の活動が多かったが、その現場で展開されたであろう当事者である戦傷病者の下から目線の活動は、意図せぬ新しさを含まざるを得ない。だからこそ、こうした活動は戦後日本のリハビリテーションなど臨床活動の一つの基盤になったのではないだろうか。

（さとう・たつや）

内容見本

（7）第三十七號　みくにの華（月刊）　昭和十五年一月一日（第三種郵便物認可）

傷痍軍人指導者修養會

昭和十四年度に於ける本會實施行事の白眉として、全國各支部、分會の指導的立場に在る會員二百名を招集、愈々修養を勵み率先窮行會員指導の萬全を期せしめんとする傷痍軍人指導者修養會は、十一月二十一日、二日の二日間に亘つて、神田區一ツ橋の本會本部に於て開催された。修養會第二日は特に宮城内に參進することを得、御府禁苑を拜觀することを差許され、感激一入深いものがあつた。

【寫眞】第一日本部前に於ける記念撮影

第一日

案じられてゐた空模樣も、この日はくつきり晴れて、初冬の和やかな陽差しが會場に射光し出した頃、前夜來より本部にて定めたる宿舍に待期してゐた會員や當日上京した會員は續々來場、午前八時より受付を開始した。

各會員は右肋に輝く軍人傷痍記章、左肋に往年の武功を物語る勳章を佩用、會員を八班に編成、事故不參の四名を除き五十一支部より參加の百九十四名、肅然と着席

來賓として軍事保護院より本庄總裁、兒玉副總裁、數藤援護局長、平井總務課長、高橋指導課長、伊場事務官、陸軍省より佐々恩賞課長、小杉少佐、海軍省より三戸人事局第二課長、川崎中佐、顧問江藤少將等臨席

會は梅澤庶務部長の開會の辭に續いて國歌齊唱、宮城遙拜、默禱次に林會長より左記の如く式辭があつた。

『茲ニ指導者修養會ヲ開催スルニ至リタル主旨ニ就テ開陳スル所アラントス。本修養會ノ目的ハ各支部會員ノ中ヨリ其ノ平生ノ心掛ヘモ亦行モ共ニ我會員ノ模範トナル樣ナ人々ヲ招集シ此人々ニ我國體ノ……

……ニシテ衆心ノ一致ヲ求ムルニ在ルノテ諸士ノ奮勵ヲ期待セサルヲ得ナイノテアル。諸士ハ皆不自由ナ身體ヲ持ツテ居ルノテアル。主催者トシテハ之レニ關シ夫々ノ注意ヲ拂フカ諸士自身亦常ニ精神ヲ緊張シ自重自愛以テ修養ニ精進センコトヲ望ム。開會ニ臨ミ一言以テ式辭トスル』

續いて本庄總裁より左記の如く告辭があつた。

『本日茲ニ大日本傷痍軍人會ノ主催ヲ以テ傷痍軍人指導者修養會ノ開催セラルルニ當リ一言所懷ヲ述ブルノ機會ヲ得タルハ深……

……ニ寄與スルトコロアルベシ。今回大日本傷痍軍人會ガ指導者修養會ヲ開催スル以所ノモノ亦茲ニ存スベキヲ信ズ。希クバ指導者諸子特ニ時局ノ重大ナルヲ銘肝セラレ能ク傷痍軍人ノ精神指導ニ精進シ傷痍軍人ヲシテ自奮自勵再起奉公ノ誠ヲ効シ以テ上ハ　皇室ノ殊遇ニ應ヘ下ハ國民ノ倚信ニ副ハシメラレンコトヲ一言以テ告辭トス。』

閉式の辭に次いて一同玄關前にて記念撮影、午前十時三十分より特に本會のために講演を快諾せられた前侍從長、樞密顧問官、海軍大將、男爵鈴木貫太郎閣下登壇、御……

第37号　1940年1月1日

（3）第四十五號　みくにの華（月刊）　昭和十五年九月一日（第三種郵便物認可）

傷痍軍人の妻としての苦心

武田はる

筆者武田はる（五三）さんは名古屋市中川區[redacted]元陸軍歩兵二等兵武田新之助（五九）氏の妻女で、三十餘年間「腦を患ふ傷痍軍人の妻」として夫に仕へ、世の荒波と闘ひ、よくそれにうち勝つた人。本稿は先般の傷痍軍人修養講座に「傷痍軍人の妻としての苦心」を放送されたその内容要旨である。

私の主人は日露戰爭が勃發しますや補充兵の二等兵として從軍し御國の爲めに身を以て奮戰して居りましたが、明治三十八年三月七日及び八日の李官堡の戰闘で地雷火にかゝり頭部及び顔面に爆裂創を受け其後衞戍病院で三月より八月迄療養して居ましたが止むなく内地に後送されて退役となりました。それ以來腦を痛めて正常な考へが出來ず狂人のやうな生活を續け毎日ごろごろと暮して來ました。爾來三十有餘年隨分永い永い間で苦勞を續けて參りましたがその間の苦勞の昔話しをして順序なしで感じた儘申しますが何にか御參考になれば結構と想ひます。

夫の歸還して參りました時、私は十七歳にして昔は隨分早く結婚しましたものです、其の頃私は生後五ケ月の長男有造を抱へ生活の苦しい時にはお米が一升十一錢なのに政府より預ける恩給も只今の樣に戴けなかつたので大變困つた事もありますし主人は腦をやられて何も出來ませんので、私が破れ草履を履いて車の梶棒をとつて働いて來ました。主人は狂人同樣ですからむづかしく何度泣かされたか解りません。大正十三年迄は再診斷の方法もなく、初めて再診斷をしてやると申されましたので本當に有難く、主人をすかして其の日は本願寺別院へお詣りするのだとだまして家を連れ出し衞戍病院へつれて行き再診斷を乞ひました。「外科なら切開するが精神病のやうな有樣では何れとも手のつけようがない、まあ出來る丈手當をするから」と云はれ三十餘日病院に入院をお願ひ致しましたが退院後も同じで地雷にかゝつたその當時の姿をして時々狂ふのです。初め五項症を頂いて居りましたが再診斷の結果四項症を貰ひました。主人は普通の人のやうで話をして居りますが段々と途中から變になつて自分の年齡などもわからず、子供の樣な事を云ひ、ぼんやりして居ります。

戰爭へ行く迄の事より記憶がありません。思つてみれば年七拾五圓頂き日割して一日十七錢に當りました。それで子供を抱へ當時米一升十一錢でありましたので其のお金が尊くて尊くてと申し暮しました。

その當時市電も汽車も優待はありませんでしたが此頃は市電も汽車も優待して戴けますので或時主人を連れて、京都詣りをして宿屋へ泊らうと思つて主人を待たせておいて宿屋で料金を尋ねてゐると、一泊二圓か一圓五拾錢だと宿屋で言ふのを傍へ來て聞いてゐた主人が「高い」と大聲で言つてさつさと一人飛出してしまはれるので泊ること出來ずそんな風で旅行はいつも夜行から夜行で致しました。

それは主人の覺へのある頃は名古屋の御園通りでは一泊三拾錢で泊ることが出來たからその事が頭に殘つてゐるためでした。

私が主人と結婚したのは、主人が二十一歳で私が十六歳でした。應召の時は子供が生れてにこにこ笑ふ位でした。當時貧乏で年寄と幼兒を抱へて本當に男のやうな仕事をして、苦しみました。主人が歸つて來てからは、そんな譯で子供も出來ず暮して來ました。

日露戰爭後二十一年間初めて再診斷をして頂くことが出來て有難く思ひます。その二十一年間は癈兵に對しては本當にひどく、當時の世間の人は癈兵そこに居るかとも云はなかつたので私は米が一升六十四錢の時、日割二十一錢しか貰はなかつたことがありその時は足袋は三度も四度も修理して履くやうにして夜は遲く迄破れ草履を履いて車の梶棒を握つて働きました。

そんな樣なわけで話しても話してもつきない程永い間苦勞をしましたが、いつも命のある限り、三膳の御飯をいただく限り、一生懸命働きました。そして働いて食べる三膳のおいしさをしみじみ勿體なく思ひました。今では息子が立派に成人して今年三十七歳自動車の免許を得まして自動車三臺、雇人五人を使ひ手廣く自動車運送業を營む、かたわらやさしい言葉をかけて慰めてくれますので本當に辛棒の花が咲いた樣な氣持がして、いよいよ死ぬ時も近づいたが死花が咲くかなあーと思ひます。

或時はこの子のために死場所をさがしてさまよつた事もあつたのに現在の息子のやさしい言葉に昔の苦しかつた事を忘れてゐます。主人は何も慰めも云つてくれませんが、こうして息子が私の苦勞を思つてくれるのが私に取つては有難くて有難くて涙が先に立ちます。主人は又戰爭の話になると夢中になります。滿洲事變の時ラヂオを買ひまして、ニユースや講演を聞くと、話を聞き乍ら特にそれが戰爭などのことですと熱中して汗を出して倒れたりするのでそれ

第45号　1940年9月1日

既刊図書のご案内

《編集復刻版》
傷痍軍人・リハビリテーション関係資料集成 全7巻
電子書籍

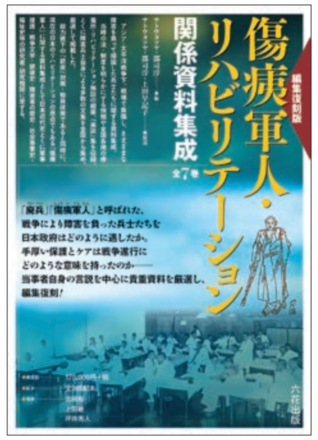
◆編＝サトウタツヤ・郡司淳
◆解説＝サトウタツヤ・郡司淳・上田早記子

戦争で障害を負い、「廃兵」「傷痍軍人」と呼ばれた兵士たちを日本政府はどのように遇したのか。手厚い保護とケアは戦争遂行にどのような意味を持ったのか。当事者自身の言説を中心に貴重資料を厳選。

◉体裁――A4判／上製／総2、500ページ
◉揃定価――175、000円＋税（税込192、500円）
◉推薦――吉田裕・上田敏・坪井秀人

2015年11月刊／ISBN978-4-86617-200-2

第1巻●制度・施策／医療・教育編Ⅰ＋解説
第2巻●制度・施策／医療・教育編Ⅱ
第3巻●手記・文芸作品編Ⅰ
第4巻●手記・文芸作品編Ⅱ
第5巻●手記・文芸作品編Ⅲ
第6巻●手記・文芸作品編Ⅳ
第7巻●手記・文芸作品編Ⅴ



《編集復刻版》
昭和期「銃後」関係資料集成 全9巻

◆編・解説＝一ノ瀬俊也

アジア・太平洋戦争の時代（1931〜45年）、日本軍・政府と地域社会は、戦場で戦う兵士に思い残すことなく命を捧げさせるために、もうひとつの「戦場」である「銃後」をどのように慰撫し、激励し、また管理し、抑圧したのか。忘れ去られた動員のありよう、軍事援護の実態の貴重資料を呈示し、明らかにする。

女性史、軍事史、軍事教育史、戦時生活史をはじめとする近代史研究に必備の「銃後」資料66点を厳選し復刻刊行!

◉体裁――A4判／上製／総3、300ページ
◉揃定価――225、000円＋税（税込247、500円）
◉推薦――吉田裕・加納実紀代・成田龍一・前田一男

第1回配本
2012年12月刊　本体75、000円＋税
ISBN978-4-905421-28-3（税込82、500円）

第2回配本
2013年5月刊　本体75、000円＋税
ISBN978-4-905421-32-0（税込82、500円）

第3回配本
2013年12月刊　本体75、000円＋税
ISBN978-4-905421-36-8（税込82、500円）

【お知らせ】本書はパンセ学術図書販売株式会社の専売商品となっております。日本国内でのご購入はパンセ学術図書販売株式会社（電話 0120-518-521）よりお願いいたします。

《編集復刻版》
精神障害兵士「病床日誌」全3巻

◆編＝細渕富夫・清水寛・中村江里

ベトナム戦争以後、より顕在化した、侵略する側の兵士のPTSDは、アジア・太平洋戦争下の大日本帝国陸軍の兵士たちにおいても深刻であった。

陸軍病院に残された記録から、市民生活から切り離されて暴力と殺戮の現場にかり出され、戦争神経症を発症した、兵士らが経験した「戦争」を浮かび上がらせる。

『病床日誌』知的障害編・戦争神経症編（不二出版刊「資料集成　戦争と障害者」所収）に続く、神経衰弱編および新発田陸軍病院（新潟）の精神障害兵士の記録!

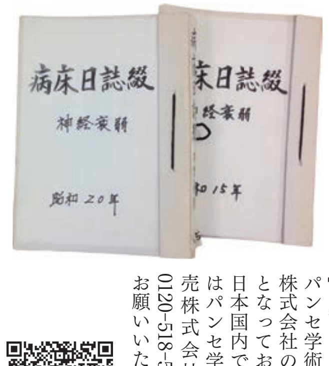
◉体裁――A4判／上製／総約950ページ
◉揃定価――75、000円＋税（税込82、500円）
◉推薦――吉田裕

第1巻『病床日誌』（国府台陸軍病院）神経衰弱編Ⅰ
2016年12月刊　本体25、000円＋税
ISBN978-4-86617-024-4（税込27、500円）

第2巻『病床日誌』（国府台陸軍病院）神経衰弱編Ⅱ
2017年6月刊　本体25、000円＋税
ISBN978-4-86617-025-1（税込27、500円）

第3巻『病床日誌』新発田陸軍病院編　解説＝中村江里
2017年12月刊　本体25、000円＋税
ISBN978-4-86617-026-8（税込27、500円）

【お知らせ】本書はパンセ学術図書販売株式会社の専売商品となっております。日本国内でのご購入はパンセ学術図書販売株式会社（電話 0120-518-521）よりお願いいたします。



《編集復刻版》
近代日本PTSD関係史料集成 全2巻

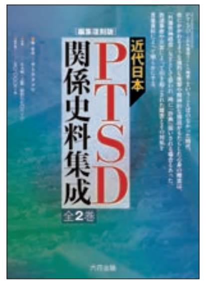
◆編・解説＝サトウタツヤ

PTSD（心的外傷後ストレス障害）ということばのなかった時代、命にかかわるような強烈な衝撃や精神的な強迫がもたらした心身の障害は、「外傷性神経症」などとして扱われた。

鉄道事故や災害によって引き起こされた障害とその対処を貴重資料によって明らかにする。

◉体裁――A4判／上製／総約770ページ
◉揃定価――50、000円＋税（税込55、000円）
◉推薦――橋本明・佐藤雅浩・森茂起

2019年5月刊
ISBN978-4-86617-056-5



もうひとつの戦場
――戦争のなかの精神障害者／市民

◆編著＝岡田靖雄　◆著＝野田正彰・蟻塚亮二・中澤正夫

戦時下、精神病院での入院患者の死亡率が異様に高かったこと、デング熱実験など精神病院での人体実験、戦後直後に行われた空襲時精神病調査、空襲被害者、沖縄戦による被害者、原爆被害者の今も続くPTSD、戦場における兵士の精神疾患など、戦争が市民を精神障害に追い込むさまを立証する。

◉体裁――A5判／並製／228ページ
◉定価――1、800円＋税（税込1、980円）

2019年7月刊
ISBN978-4-86617-080-0

復刻版

大日本傷痍軍人会機関誌

みくにの華

全3巻

●体裁
B5判・上製・総978ページ

●揃定価
75,000円＋税（税込82,500円）
ISBN978-4-86617-244-6
2024年6月刊行

●解説
上田早記子

●推薦（五十音順）
一ノ瀬俊也（埼玉大学）
サトウタツヤ（立命館大学）

全3巻概要

第1巻（巻頭に解説＝上田早記子）

第1号～第36号｜1937年1月～39年12月

第2巻

第37号～第60号｜1940年1月～41年12月

第3巻

第61号～第93号｜1942年1月～44年11月

付録CD-ROM（総目次デジタルデータ）

キーワード

＃戦争とトラウマ	＃日本近代史	＃障害者福祉
＃白衣の勇士	＃軍事援護	＃傷痍軍人
＃障害者	＃リハビリ	＃視覚障害
＃聴覚障害	＃四肢損傷	＃戦傷病者
＃温泉療養	＃行商	＃待遇改善運動
＃廃兵	＃白衣募金	

六花出版　〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-28　電話 03-3293-8787　FAX 03-3293-8788　https://rikka-press.jp